「更級日記」における自省のかたち

土井廣子

世の中にあるという物語というものを何とか見たいと思い始めた、少女時代の追憶で生涯の記を書き起こす「更級日記」の作者にとって物語は、生涯自分を引き付けて止まないものだった。その物語を初めてまとまった形で手に入れ、独り読み耽けった心地を、「后の位も何にかはせむ」と記しつつ振り返る作者には、かつての嬉しさが生々しく呼び起こされていたに違いない。しかし同時に作者は、物語のみに占められていたかつての我が心を「まづ、いとはかなくあさまし」と批判するのである。また、年老い、夫を失い、失望のうちに生涯の記を書き終える作者は「昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心に占めて、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」と、かつての自分を悔いをもって振り返るのである。

作者は、自らの人生を振り返る時、物語のみを心に占めていたかつての自分を「はかなくあさまし」とか「よしなし」といった批判的な言葉を添えて悔やまずにはいられなかった。その時、かつての自分を後悔させる何かが、作者のうちに働いていたはずである。それは何だったのだろうか。

もっとも、作者が自らの生涯の記を書くに当たって「よしなし」というとらえ方で代表される自省について述べることを、積極的に意図していたとは言い切れない。しかし、自分のかつてのあり方を繰り返し批判的に省みる作者の態度には、その背後にあって作者に自省を機能させる、確かなものの存在を窺わせるものがある。それを探ることによって、作者の自省のかたちを少しでも明らかにしてみたいと思う。

一

作者の自省の意識を追って行くと「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて……」という言葉が注目される。この言葉を挟んで、記事中の作者の意識は二段階に分かれている。前半は、「よしなし心」を持ちつつそれを悔しいことだと知らない段階であり、後半は、それを知っている段階である。作者がこの時具体的には何を知ったのか、なぜ悔しいのか、それを問う前にまず、

前半の作者の様子、すなわち、昔の自分の心を悔しいと知り果てた作者がその意識で照らし出す「よしなし心」を持ったかつての作者の様子を、概観しておこう。

作者のかつての自分への批判の目は、まず、物語のみを心に占めていたことに向けられている。物語を心に占めた時、少女時代の作者はそこに自分の未来像を重ねようとしていた。

われはこのごろわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ。

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ。

そして、この未来像は「あらましごと」、つまり、実現しそうなことにも思われていた。

物語のみを心に占めていた少女の夢に僧が現われて「法華経五の巻をとく習へ」と告げるが、少女はそれを人にも語らず、習おうともしなかった。また、夢に現われた人が「天照御神を念じませ」と告げるが、少女はそれを何とも思わずに過ごしてしまった。作者の批判の目はかつての自分が夢の告げを無視し続けたことにも向けられ、それを「いといふかひなし」と非難する。夢の告げが作者に指示した、法華経を習ったり天照御神を念じたりすることは、このごろの世の人のする行為であったが、物語に熱中する少女にはそのような行為は思いもかけられなかった。

稀にする物詣にも身が入らないでいる少女の夢に僧が現われ「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と不機嫌に告げるが、少女はそれを心にも止めない。この少女のゆくさきの様を夢に見せようと、母は初瀬に僧を詣でさせた。僧の見た夢には美しい女性が現われて、奉った鏡に写る二つの影、悲しげな影とうれしげな影を示したが、少女は自分の未来の様がどのように見えているのか気にも止めなかった。夢の告げは少女に、自分の未来へ切実にかかわることをも促していたはずだったが、物語に重ねた自分の未来像を実現しそうなものと思い、また、親がひとかどの任官をしたなら自分も「やむごとな」い身になるだろうと思っていた少女には、未来は切実なものではなかった。

物語のみを心に占め、夢の告げを無視し続けた少女にも、やがて、それでは済まされないことが分かってくる。年老いた父は思うに任せない任官を終えると、世に交らうことを止めてしまった。家の中でひとり頼りにされる作者は結婚することになる。物語に重ねた未来像は、光源氏のような高貴な美しい男性を介して我が身に実現されるはずの結婚の像であったが、作者の実際の結婚は、それとはあまりにかけ離れたものであった。かつて「このごろわるき」少女は、はるか先に、到達すべき美しい自分の未来像を夢見ていた。その時到達点と少女の間に横たわっていた時間は、未来に切実にかかわることなく、夢見るだけで満足することを許すものであったであろう。ところが、時の経過が夢の告げを無視し続ける少女

を到達点に運んだ時、彼女がそこに見出したのは、依然として「このごろわろき」自分の姿でしかなかったのだ。

落胆と断念を経て始まった結婚生活においては、作者は、物語のこともすっかり忘れられ、心も「物まめやかなるさま」になり果て、「まめまめしく」過さなければならないはずであった。しかし彼女は、結婚前から始めていた宮仕えに時々召されて出て行く。宮仕えは、仕え続ければ、然るべき待遇を受けられるようになると期待できるはずのものだったが、結婚した彼女は専念を諦め、従って自分より勝れた人がいても羨ましくもなくかえって心安く思われながら、時々仕えるようになっていた。成人した彼女は、本来どちらか一方に行為を集中すべきだと自ら意識される二つの生活の場を持つようになっていた。双方には、結婚、宮仕えというそれぞれの事柄に即してとるべきあり方が要請されていたが、彼女は、「まめまめしく」過す、仕え続ける、というそのどちらのあり方にも専念できずにいた。

以上が、作者の批判の目でとらえ返されたかつての自分の様子の概略である。このような経過で成長した作者は次のような認識に辿り着かなければいけなかった。

などて、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物詣をもせざりけむ。このあらましごととても、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫の大将の宇治にかくしすゑたまふべきもなき世なり。あなものぐるほし。いかに、よしなかりける心なり。

かつて自分の前にあり、その時の自分をそれなりに許していた時間は、ここに到って、おこないも物詣もせずにいたづらに臥し起きした多くの年月として、悔いの中に振り返られる。自分のあり方を無益だったと判断する目は、それにとって代わるべきおこない、物詣という行為をはっきりとらえ、さらに、無益に過した時間に自らの心を占めていた内容に向かって批判を加える。物語は物語、この世はこの世である。この相違を見分けずに、存在する場の無い恋の実現に自分の未来を託していた心が、どんなに無益なものだったろうか。ここで、物語に占められていた我が心を無益だと批判させているのは、虚構の物語が提示する恋の存在を拒否する現実の世の認識である。「はかなくあさまし」という心情的な非難の言葉をはかせているものを、ここで作者ははっきりと世としてとらえている。自分の未来像は、物語ではなく、世に重ねなければいけなかったのである。

昔のよしなし心を悔しいと知り果てた作者が具体的に知った内容は、以上のようなものであった。夢見つつ過した作者が失望を経て手に入れた自省の意識には、未来への期待という一本の筋が通っている。よしなしとは、実現を期待する未来像の世における現実性を省みないことへの批判であり、また、自分の行為のその実現における有効性を省みないことへの批判でもある。未来像が実現されるべき我が身は、未来へ向かって取戻のきかない時間の経過の中に存在しており、その時間の経過を、未来への有効な手だてをとらずによしなき様で埋めてしまったことが、悔しい所以である。その有

効な手だては、行ひ、物詣といった行為である。これらはこのごろの世の人のする行為であるから、作者にこれらの行為を促した「法華経五の巻をとく習へ」「天照御神を念じませ」といった夢の告げの言葉は、作者の周囲の人々から発せられたものであっただろう。しかし作者は、夢において、自分に向かって発せられたものとして、特に、これらの言葉を受け取っている。この時作者が夢を通して接しているのは、作者の未来を見据えたものの居る特別な場であり、これらの行為をする世の人や自分自身の居る場とは別のものであることは確かである。それは作者にとっての超越世界であると言ってよいだろう。「法華経五の巻を……」といった言葉から作者が了解したものは、今、それらの行為を通して未来の己れに切実にかかわるべし、という超越世界からのメッセージに他ならない。行ひ、物詣等の行為は、このメッセージを真摯に受け取りそれを履行するという形で超越世界と結び付いている、という意味で特権的であったのであり、結婚生活における「まめまめしく」過す、宮仕えにおける仕え続けるといった、事柄に即して要請される行為とは異次元の、未来への有効性において別格の行為と見做されていたのである。これらの行為をしなかった、夢の告げを無視した、ということへの批判は、未来像実現のためには、今のあり方が有効かどうかを省みないことへの批判であるとともに、超越世界との結び付きについて無意識であることへの批判でもある。

このような自省の意識を踏まえて、記事中の後半の作者は意志的に行為することになる。

二

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へゐて参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに豊かなるいきほひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、石山に参る。

こうして作者は未来への期待をかけた物詣を重ねるが、この時の作者は、前述の自省の意識の内に自分の行為の意味を了解しつつ行為することができていたはずである。その作者が物詣によって実現を期待した未来像は、一つには、夫の任官によって権勢、富を獲得した姿であり、また一つには、自らの宮仕えにおける「人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、后の御かげにかくるべきさま」であった。これらの内容が、作者の自省の意識に照らして妥当なものであり得たかどうかという問題に立ち入るのは後にする。とにかく作者にとっては、これらの内容は超越世界から再び「さもよしなし事をのみ」と非難されるような、物語にだけしかないようなものではなく、自ら現実のものとして認める眼前の世の像に間違いなく重なっていたはずである。その世は、帝、后を頂点とした律令体制の価値序列に従って「豊かなるいきほひ」「やむごとなき身」となり、富を得、浄土信仰に従って極楽に往生することを目指す人達が営む世であった。この世に自分を積極的に位置付けるべく始めた作者の物詣は、たとえば次のようなものであった。

大嘗会の御禊と世間が騒ぎ立てる日に、作者は初瀬の精進を始め、その日、京を出る。作者のこの行為は、「一代に一度の見物にて、田舎せかいの人だにも見るものを、月日多かり、その日しも京をふりいでていかむも、いとものぐるほしく、ながれての物語ともなりぬべきことなり」と非難されるような、常軌を逸するものであった。やがてきらびやかな行列が通るはずの二条の大路を、先頭に燈明を持たせ、浄衣姿の伴の人々を従え、水が流れるように都へ向かう人々に逆って、あざけ笑われながら「ひたぶるに仏を念じたてまつりて」作者は京を出る。

この行為は一見、大嘗会の御禊の物見が象徴する価値の領域である世への「ものぐるほしい」までの離反行為のように見える。作者は確かに物見に背を向け、行く手に仏を見ている。しかし、「物見て何にかはせむ。かかる折に詣でむ志を、さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と思い立った作者がこの「ものぐるほしい」行為によって意図していたのは「豊かなるいきほひになりて、ふたばの人をも、思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみ余るばかり」になることの実現にほかならない。また、途中の寺で夢を見、「そこは内裏にこそあらむとすれ。はかせの命婦をこそよくかたらはめ」と言われたのを、作者は「うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつ」るのであるが、この夢の告げは「人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、后の御かげにかくるべきさま」へ期待を繋ぐものにほかならない。物見から作者を離反させたものは、物見の象徴する世へ自らをよりよく位置付けさせようという、強過ぎるまでの志向であったのだ。それは、物語の恋に未来を託していた自分を「ものぐるほし」という言葉を使って自己批判した時に確認した世を志向する「ものぐるほし」いまでの強さであった。

「物見て何にかはせむ」と言う作者は、物見に象徴される世の価値から離反したのではなく、その価値の獲得を目指す今の自分にとっては、無意味な傍観でしかない、この物見を否定したのであった。作者は今のこの物見を否定して物詣をすることによって、未来においてよりよく自分を世に位置付けることができるはずだった。作者は、自らの意識においては、作者の行為をあざけ笑う人々よりはるかにまっとうに、大嘗会の御禊の行なわれる世に向かって行為していたのである。

しかし、物語の恋から現実の世へと、未来を託す対象を自覚的に変えた作者の意識にかかわらず、作者の行為には「ものぐるほし」という共通のとらえ方で批判されるべきものがあったことは否めない。それは、現在の現実からの遊離だと言ってよいだろう。作者は世を、現在自分が立っている場として見極めることよりも、未来に自分が位置付く場として眺めることをより意識的にとっている。このことが作者を現在から遊離させている。

こうした現在からの遊離も、それを肯定する視点が、作者だけにではなく他の人にもあったことが、作者の行為に賛同を示した人の言葉に表われている。

一時が目をこやして何にかはせむ。いみじくおぼし立ちて、仏の御徳かならず見たまふべき人にこそあめれ。よしなしかし。物見で、かうこそ思ひ立つべけれ。

この言葉を、作者は、自分の行為の全面的な支持と受け取っているようである。しかしこの言葉を作者の意識の脈絡から切り離して見れば、この人の 指摘する一時性は 仏の永遠性に 対するものであり、従って、永遠の彼岸に対するこの世の否定性を意味しているともとれるのである。作者にこの視点はない。作者においては、この一時性の否定に対するものは、自分のこの世における未来の肯定であり、仏もこの認識を 承認するものであるはずだった。この信念は、「はかせの 命婦をこそよくかたらはめ」という現実的な助言が夢を通して超越世界から送られてきたとされることにも表われている。作者の現在からの遊離は、自分のこの世における未来へかかわることにおいて超越世界から支持されているはずだった。常軌を逸した行為は、作者の自省の意識の中で自分が超越世界と結び付いているという意味が了解されることによって、遂行された。

この時、その行為によって作者が実現を目指していた具体的な内容については、どのように反省がなされていたであろうか。

夫の任官によって権勢、富を獲得しようとすることは、父の任官によって自分がそのうち「やむごとな」い身になるだろうと期待したことと同じではないのか。父が思うような任官を果たせないまま、年老いて世から身を引いたように、夫の任官もまた、行くえのないことであることに変わりはないのではないか。また、帝、后の庇護のもとで人の乳母になるという期待は、宮仕えに専念し、仕え続ける、ということを諦めた作者にとって、自ら不可能と知ったことではなかったのか。このように反省してみれば、作者の自省の意識の中でこれらの未来像の現実的な可能性が問われなければならないはずである。しかし既に触れたように、これらの未来像は、夢を通しての超越世界からの支持によって、その実現への期待を強められているのであり、作者は、夢の告げに対して「よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす」「うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつ」るといった積極的な応答をすることによって、それらの実現を目指したのであった。このような応答の態度は、少女時代の夢の告げの無視への自己批判を明らかに踏まえたものであり、この時の作者には、超越世界と強く結び付いているという頼もしさがまず感じられていたのであって、未来像の現実的な可能性を問わないではいられないような不安は無かったであろう。

作者が意志的にとった、物詣、行なう、念ずる、という行為は、自分を超越世界と結び付けているという意味で特権的であったが、超越世界は、現実の事柄における具体的な助言を与えていることに窺えるように、現実の事柄の内部に通じていると、作者には見做されていたのであり、従って一連の行為は、外見上は、現実への働きかけにおいて間接的であるにもかかわらず、作者には、より直接に現実の事柄に即した行為と見えていたのであり、その故に、未来への有効性において、別格の行為と見做されていたのだと言える。

昔のよしなし心を悔しいと知り果てた作者が意志的に行為した時、その行為は、以上に見てきたような、超越世界から全面的に支持されているという意識に、支えられていたのである。

三

超越世界から支持されつつ、未来像に向かって間違いなく接近し

ているはずの作者であったが、実現されていく事態は、期待を裏切るものであった。

世の中に、とにかくに心のみつくすに、宮仕へとても、もとは一筋に仕うまつりつかばやいかがあらむ、時々たち出でば、なになるべくもなかめり。

当然の帰結である。

年はややさだ過ぎゆくに、若々しきやうなるも、つきなうおぼえならるるうちに、身の病いと重くなりて……

作者の身に、老い、病をもたらした時の経過は、ついに「たのむ人」である夫の死をももたらすに到った。作者はここで、追い続けてきた未来像の実現の全面的な断念を余儀なくされる。再び落胆と断念を経た作者は、次のように自らの生涯を振り返る。

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、后の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ。あはれに心うし。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功徳も作らずなどしてただよふ。

過去の自分を振り返る時、そこに浮かび上がるのは何よりもまず行い、詣でるといった行為の不徹底であった。また、未来像に掛け続けた期待は、物語の恋の場合とは異り、諦めざるを得ないことが分かってもなお、批判されることはない。採るべき行為も、世における未来像も間違ってはいなかった。ここにおいて断念は、世にある価値に然るべく自らを位置付けることができずに、これ程まで思う事が叶わずに終わってしまった人、という、価値実現における負性を引き受けた我が身の認識を引き出したのである。

しかしこれで、作者が未来へ向くことがなくなってしまったのではない。

さすがに命はうきにもたえず、長らふめれど、後の世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに……

我が身は、諦めた現世に生き続け、さらに死後も生き続ける存在である。過去を振り返り、意志的に行為を採らせてきた大きな要因である未来の我が身の存在は、消えることがない。現世における価値実現を諦め、世の価値と我が身を行為を介して繋ぐことを止め、功徳も作らずにただよう作者も、後世という未来における自分の様を気に掛けずにはいられなかった。そこで作者の望むあり様は、言うまでもなく、阿弥陀仏の浄土に生まれることであった。

往生は既に「わが身もみくらの山につみ余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて」と語られていたように、よしなし心の反省を踏まえた作者の新しい出発に際して、意図されていたことである。作者にとって「御しるし」を期待した仏への志は、もとより「豊かなるいきほひ」と「後の世」のことを並列した内容として持つことができた。「みくらの山につみ余るばかりに」

という、一見あられもない欲望とも見える内容も、それが超越世界に支持されつつ実現を期待できたのであれば、作者にとっては、自分で勝手に望んだこととは意識されていなかったに違いない。むしろそれは超越世界から承認され、意志的に選び採るべき、持つべくして持つ願望であって、欲望とか執着といった言葉が表現するような否定的な意識が纏わるものではなかったに違いない。そして往生は、この現世での願望の次に、それと対立することなく、続けて望むことができたのである。作者は現世の願望を諦めて、今、往生を望んでいる。現世の願望が叶えられなかった事は心うきことであった。しかしその心うさが往生を要請しているのではない。現世の願望がこれ程叶えられずに、心うき状態で終わってしまう人だから、後世の願望もまた叶えられないのではないかと気掛りだと言うのである。作者にとって、往生は、既成の観念の再確認という形でさえも、この世の苦、はかなさ、身の憂さといった認識のステップを踏むことなく望まれるものであった。この並列した願望から、作者はその時の自らの状況に応じて、まず「豊かなるいきほひ」を、次に「後の世」のことを選び、それぞれの実現を超越世界に対して期待することができた。連続する一個の身にとっての時間的先後として関係する現世と後世において、作者はそれぞれの場で望むべき価値実現を望んでいるまでなのだ。

後の世のことを気に掛けながら功徳も作らずに漂っている、と作者は言う。現世での願望の達成を、作者はひたすら、詣でる、行う、という行為に託してきた。繰返し後悔されるように、それらの行為は確かに価値実現を招来するはずのものであった。「たのもし」と感じつつ行為を重ねた作者が最終的に断念した時、その事態を、自らの行為にもかかわらず訪れた結果だと言わずに、自らの行為の不徹底が招いた結果だと意識する程、作者にとって、それらの行為の価値実現への特権的な有効性は確かだった。今、浄土に生まれるという願望を抱きながら、それらの行為を放棄して功徳も作らずに漂っている、と作者が言うとき、そうさせているのは、価値実現において負性を負った我が身の認識であった。我が身の負性の認識は、超越世界に支持されつつ意志的に行為すべきであった、自分のあり方への信念を撤回することなく、断念を吸収するものであった。しかしだからといって、我が身の負性は、新たな価値実現である往生を決定的に妨げるものと思われてはいなかった。往生には、数年前に見た、阿弥陀仏来迎の夢という頼みがあった。

ゐたる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。……ことに人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくけおそろしければ、簾のもと近くよりてもえ見たてまつらねば、仏、「さは、このたびはかへりて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけず。

作者はこの夢だけを後の頼みとしているのであるが、この時、作者を超越世界に結び付け、往生の実現を期待させているのは、超越世界から自分一人に向けられた親しい声への恭順であると言ってよいだろう。作者のこの夢への態度を、以前に見た前世の夢への態度と比べてみよう。

作者は夢で、自分が前の世で清水の僧であり、仏師であって、仏

を多く造った功徳によって前世の素姓より勝って生れたのだと告げられた。超越世界との結び付きに当時まだ無意識であった彼女は、そのまま、何ということもなく過してしまったが、このかつての自分を、作者は、夢を見た後、清水にねんごろに詣でていたら、前の世にその寺で仏を念じた力によって、おのづからよい状態になっていたかもしれない、いふかひないことだ、と後悔している。

功徳を作り、それが然るべく報われながら、なお、その後の行為の不徹底が悔やまれる、という感じ取られ方が一貫していたなら、作者は今、往生を願望しつつ、功徳を作らずに漂っていられるはずはない。しかし作者は、自分を超越世界に意志的、積極的に結びつけることによって超越世界から支持されると信じた行為を止め、なお、夢を通した親しい声に、受動的な、超越世界との結び付きを感じ取ることができるのである。超越世界との結び付きの上に立ってしっかりと確立されたはずの作者の自省の意識は、それ自体一部も撤回されることなく機能しながら、行為を止めた今の自分をそれなりに許しているのである。

四

以上のように追って来た作者の自省の意識は、全面的に、超越世界との繋がりに依拠している。その、作者にとっての超越世界は、より具体的にはどのようなものだったのだろうか。

作者の超越世界は、仏や天照御神といった、世の一般的知識を要素として成り立っているはずのものであり、また、それ自体の内に矛盾や対立を含まない一つの世界と見做されているようである。しかし作者は、より確かな知識と、その統一的な意味了解によって具体的な像を明らかにしようとはしていない。たとえば作者は、功徳を作らずに漂うことと、阿弥陀来迎の夢を頼みにすることの意味関係を、自ら、少しでも気遣う様子はない。また往生は、その意味を全く問われることなく望まれている。作者の超越世界との交渉は、知的な営みによって、その像や意味するものを積極的に探ろうとする契機が全くないといってよいのである。超越世界は、作者にとって、知的な営みや一貫した行為によって自分との距離を測り続けなければ、到達し、交渉することができないような、自分と離れたものではなかったし、最終的に自分のあり方を断罪するような絶対的な規準を持ったものでもなかった。それは、その時その時の自らの状況に応じて身を寄せることのできる、直接な、親しい世界であった。その世界は夢を通し作者に、前世の様を知らせ、未来へ向かって行為することを促し、後世を期待させた。我が身の連続存在を信じて疑わない作者にとって、自分のものでありながら、自ら知ることのできない、前世、現世での未来、後世、における我が身の様は、超越世界を通してかかわることのできるものであった。超越世界は、我が身の存在全体を見据えている世界なのである。作者にとっての超越世界の超越性は、自分自身に不可知である自分自身を見据えているという一点に、その一貫した根拠を見出すことができるものである。それ以外には、その超越世界に必然であると思われる内容を見出すことができない。その無内容さが、超越世界に、様々な願望を容れ、具体的な助言を提供することを可能にしているのではないだろうか。たとえば、「法華経五の巻をとく習へ」という、

一見、超越世界の必然的な内容と思える言葉も、おそらくは、物語に熱中して独り閉じ込もる少女を、その将来を気遣って、世間の他の少女達と同じようなことをするようにと促した、周囲の人の世間的な助言であっただろう。それが超越世界からのメッセージたり得たのは、その言葉に込められた不可知の未来への気遣いの指定であり、周囲の人への謙虚さではなく、まさに超越世界への謙虚さで受け取るべきだったのだ、という、後の作者の認識によるものに違いない。作者が我が身の不可知の部分を、それとして意識し、気遣う時、そのことがすなわち、作者にとっての超越世界との交渉であったのだ。我が身は、不可知な存在を持つことで、この超越世界と、いわば同値の関係で繋っているのである。

「よしなし」というとらえ方で代表される作者の自省は、このような超越世界との繋りを背景としてなされている。しかしそれは、生涯の記を書くという作者のトータルな意図のもとに、時折顔を出すものであり、従って、そのより詳しい性格は、これまで明らかにしてきたような超越世界を背景として持つ作者が、どのような意図で生涯の記を書いたのか、その意図のもとで、自省について述べることがどのような役割を持たされているのか、といった、より広い問題意識のもとに、考察され続けなければならないことは、言うまでもない。

（引用はすべて、小学館「日本古典文学全集」によった。）